

---

## Starting line

るうあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Starting line

### 【Nコード】

N6664Y

### 【作者名】

るつあ

### 【あらすじ】

「微妙な関係」の俺と彼女。それを崩すタイミングが、ある日俺の前に降ってきた。ナツとなっきの日常恋話。【注・本家サイト「真夜中の箱庭」に以前掲載していた話です】

タイミングを見計らうというのは、存外難しい。

うかうかとタイミングを逃し続けてきた結果が、今のこの状態だ。不均衡な、彼女と俺の「微妙な関係」。

しかし「微妙な関係」というのも、俺が一方的にそう思っているだけだ。

その点がやっぱりどうにも「微妙」で、情けない俺だった。

\* \* \*

タイミングを逃しまくって訪れた二年目の十二月。

師走というだけあって、何やら忙しい気分には追い立てられる時節だ。

どうやら彼女、なつき 伊藤南月 も、むやみやたらに焦っ

ていたらしい。

「お、いたいた、搜したぞ」

大学構内の北端にある古びた校舎の一階、年じゅう日当たりが悪  
いせいで薄暗くじめじめした、通称マッドサイエンティスト養成所、  
薬化学科の阿坂ゼミ室に彼女はいた。

隙間風の忍び込むゼミ室の窓辺、なつきは明かりも点さず茫漠と  
した様子で頬杖をついていた。

「おいおい暗いな。電気くらいつけろって」

暖房はついてしたが、利きが悪いせいで足元から冷えてくる。と  
もあれ俺は電気をつけ、独り窓辺で物思いに耽っているらしいなっ  
きを確認した。

明かりをつけられたのが嫌だったのか、なつきはため息をつきつ  
つ、こちらにいかにも不機嫌そうな面を向けた。

「うっわ、何それなつき？ ヒデーな、その顔？」

「ヒデーとは、ひどいね。……そりゃ、実際酷いけどさ」  
むすうつと、なつきは口を尖らせた。

なつきの顔は、フォローのしようがないほどにひどかった。

二重まぶたの大きな目は腫れ上がり、顔全体的が浮腫んでいる。  
頬は赤いが、表情は暗く沈んで普段の朗らかさなど微塵もない。ねこつ毛の短い髪は、いつもならピンでとめたりワックスでかためたりして小奇麗にまとめているのだが、寝起きですかとツツコミたくなるほどボサボサで、あちこち跳ね上がっている。

「ほんとヒデーな。何があったわけ？」

「……ほつといて」

突き放すように言うと、なつきは机に顔を落とした。ゴチンと音がし、「いた」と呟く。

俺は腕を組み、暫時頭を捻ったが、おおよその見当はついていない。

「……………ああ、あれか。苑田に告白、で、玉砕？」

「ちよっ!!」

机に突っ伏していた顔を素早く上げ、なつきは心底びっくりしたように俺を見やる。

「なっ、なんで知ってんのっ？ もしかして現場覗き見っ？」

「恥じらいというより、怒りの形相だ。」

俺はやれやれと、わざとらしく肩を竦めて見せる。

「あいにく覗き趣味はないんで。現場は見えないけど予想つくってこの一週間、なんか妙なテンションで気合入れたただろ？ クリスマス近いし！ とかなんとか」

なつきはたじろぎ、声を詰まらせた。迂闊すぎた自分を改めて思い返し、赤面している。

思い込んだらそれにしか意識が向かないなつきは、それで後悔する事もしばしだった。

「けど、苑田のことなんて、口にしてない……………と思っただけど」

「なつきが苑田に惚れてたってのは、前から知ってたし」

「げ」

なつきは顔を歪ませる。

嘘が下手なくせ、内緒にしていた。同性の友人には、あるいは話していたのかもしれないが、見ていればわかる程度に、なつきの視線は常に苑田に向けられていた。

「で？ 苑田、なんて？」

「……………気持ち嬉しいけど、俺、彼女いるからって」

「即答？」

「即答」

苑田に彼女がいることも、俺は知っていた。なつきが苑田に片想いをしているとわかったその時点で、とうに。だからといってそれをなつきに知らせるほど俺は親切でもなければ、愚かでもなかった。俺は腕組をしたまま、ため息をついた。

苑田は同学年で同学科、ゼミは違うが受講する課目が重なり、顔を合わせる機会が多かった。俺も含めてだが、皆と一緒に遊びに行ったり飲みに行ったりと、自然と「友達」的な関係になっていった。陽気で社交的な苑田は、ノリが軽すぎるところもあるが、総体的に見て「好青年」の類に入るだろう。

しかし、なつきが苑田に惚れるのも無理はない……………とは思えなかったし、なんでだよと舌打ちもした。

あいにく自惚れが強い性格じゃなかったため、「俺の方が……………」とは言えなかった。

臆病風に吹かれたと言われれば、それまでなのだが。

タイミングを逃した、それが最初の機だったのかもしれない。

「しよーがねーな……………ほれ」

なつきの傍に寄り、俺は両腕を横にひろげ、胸を開けた。

「……………は、何？」

「こういう時は男の腕の中で泣く方が、絵になるだろ？ ほれ、遠慮はいらん。大いに泣きタマエ？」

「ア、アホかつ！？」

「……ぐげっ」

泣き場所を提供してやるつと胸を開けてやったというのに、そこに飛び込んできたのは、手加減なしの拳だった。

「フラレ女の鉄拳、きつっっ」

「フラレ女言うなっ」

「いや事実だし」

「あのねえっ、ちょっとこうっ、デリカシーってもんはないのっ？」

「なんだよ、慰めてやるうってのに。同名コンビの俺達のよしみで  
な」

「同名コンビ、関係ないし！」

「つれないなあ、ナツキさんよ？ 同名だけじゃなくて、同姓コンビでもあるのに」

「いやだから！ もうちょっと慰めようがあるでしょ、同姓同名とか言う以前にっ」

なつきは声を荒立て喚く。

「どうやら、少しは元気を取り戻したようだ。」

「はいはい、すみませんね」

「誠意がない」

「そりゃごもつとも」

誠意などこめられるわけがないだろう。

慰めてやりたい気持ちは本当だが、同情してやれるほど俺は寛容じゃない。

同姓で同名だからといって、以心伝心というわけにもいかない「微妙な関係」に、俺は歯噛みをするばかりだった。

彼女の名は、伊藤南月。

俺の名は、伊藤夏樹。

漢字は違うが、「イトウナツキ」という同姓同名の俺達だ。

彼女は「なんちゃん」「なつき」等のあだ名で呼ばれることが多い

く、俺は後者を採った。そして彼女は俺を「ナツ」と呼ぶ。  
お互い、自分の名を呼ぶのに少々の抵抗を感じた結果だった。

なつきは人懐こく活動的な性格だ。外見もそれに合い、化学実験室にこもっているような印象は持たれにくい。

しかしながら、なつきは「薬品にまみれた白衣な人生を送る」のが夢らしい。化学的探究に没頭するインドア生活が将来の希望とは、マッドサイエンティスト養成所へ浮かれ勇んで入所するだけのこと  
はある。

元素の周期表をうっとり眺め、元素番号を陽気に口ずさむなつきは、

「ナツは白衣が似合っていていいよね。眼鏡さ、ずっとかけてたら？  
いかにも胡散臭い化学者って雰囲気出て、三倍くらいは賢そうに見えるし」

などと、屈託のない笑顔で俺に言う。

素直に喜んでいいものか微妙な気分させられたが、なつき流の最上級の褒め言葉らしいことはわかったので、期待に副うべく、眼鏡は常に持参することにした。我ながらいじらしいね。涙が出るほどだ。

そんな健気な俺の気持ちを、なつきはまったく察せず、汲んでもくれない。

だが、煮えきらない俺も悪いのだ。なつきばかりを責められず、  
そうして「微妙な関係」が保たれてしまった。

「それはさておいて」

「おいとかないでよ」

強引に話を転じようとする俺を、なつきは速攻でつつこんでくる。  
俺は大きく息を吐き、皮肉げに笑った。

「なるほど。話を、苑田のことに戻したいわけだ？」

「……………」  
腫れぼったく潤んだ目で睨まれ、いささか憐憫の情がわいた。しかし殊勝に謝るほど、俺はお人好しじゃない。

「はいはい、スミマセン。話を穿り返すような真似はいたしませんよ、ナツキ様」

「……………」  
なつきは不機嫌顔だが、俺だと顔に出さないだけで、いい気分じゃない。

少しくらい子供っぽい意地悪言っただっていいと思うね。

「さて。なつきのこと捜していたわけだが」

一息ついてから、今度こそ話を転じた。

「しょんぼり落ち込むなつきに、さらにしょんぼりなお報告があります」

わざとおどけた口調を作って、俺は言う。

「薬学有機のレポート、提出してないだろ？ 提出期限、昨日だったんだけど？」

「っ…!」

なつきは仰天し、目と口をぱっかり大きく開ける。

「橋本センサーから伝言。提出の遅れは今回に限って大目に見るから、明日には必ず提出しろってさ」

普段真面目に授業に出ていた甲斐があったな、と笑って付け足した。

「うつそ、どっ、どっ……………」

なつきはすっかりパニック状態だ。両手で頭をかかえ、ぶんぶんと振っている。

どうやら素で忘れていたらしい。苑田に気を取られていたせい、つまり「自業自得」だとは口が裂けても言えない。

「ちよっ、やっ、もう何これ？ 不幸連鎖菌に感染でもした、わたしっ？」

「さあ、それはどうだか」



そんな菌種はついぞ聞いたことがない。新種の菌ですか、などと訊けばもう一発鉄拳を食らうのは火を見るより明らかだ。しかし、うっかりすると空気感染しそうな菌ではあるな。

肩を竦める俺に、なつきは「どうしよう」を連発してくる。

「どうしようって言われてもなあ。もしかしてまるつきり書いてない？」

「八割がた書けてはいるけど、まだまとめてないっていうか、清書途中っていうかっ」

「八割ねえ……」

と呟いた俺に、なつきは哀願のまなざしを向けてきた。

「ナツ！ お願いしますっ！」

「……………」

予想はしていたが、すんなりとは領けない。

なつきは俺の手を両手で包み込むようにして握り、「手伝ってくれ」と頼み込んできた。むろん、タダでは言わなかった。

「学食のAランチ奢る！」

「Aランチねえ」

俺は意地悪く、そっぽを向いた。だがなつきの手を振り払うまではしなかった。

「コーヒー付きで！」

「コーヒーかぁ」

「そ、それじゃデザートもつける！ 甘いもの、ナツ好きだったよね？ ねっ？」

……………結局は、それで手を打つことになった。

もしかしたらこれは、棚からぼたもち的な好機を得るチャンスかもしれない。

その誘惑に、俺は負けた。

それに、ここでまたタイミングを逃してしまえば、もう次はないかもしれない焦りも、やはりあったのだ……………。

## Starting line 2

場所を構内の図書館に移し、俺は資料になる本を用意してやって  
いた。

大急ぎで書きかけのレポートを取りにいったなつきは、小一時間  
程で戻ってきた。こういう時大学の近くにアパートを借りているの  
は便利だ。友人らの溜まり場になってしまふ弊害もあるのだが。

なつきは目の色を変え、レポート用紙に筆を走らせている。向か  
いの席に座っている俺のことなど、まるで眼中にないが如くだ。

選りすぐってきた参考書から要点をピックアップし、ノートに書  
き連ねる。その作業がおおよそ済んだ頃、俺はぼつりとこぼした。

「俺ね、けっこうあくどいし、卑怯な男なんだよな」

「は？」

なつきは顔を上げた。ぴたりと手を止め、「いきなり何？」と訝  
しげに俺を見る。

「言われる前に言っておこうと思ってさ」

「誰がそんなこと言うの？ ナツって、あくどくなんかないじゃな  
い。てゆーか、むしろ超親切！」

こうしてレポート作成の手伝いをしてもらっているからそう思う  
わけだな？ ムシがいいというか、ゲンキンというか。

呆れ顔を向けると、なつきは照れくさそうに笑って応える。

「や、それだけじゃないって。ナツっていいヤツだって思ってるよ。  
いい友達持って、ほんと幸せだよ、わたし」

「トモダチね……」

無邪気な顔して、さくつと傷を突いてくれるなつきだ。

「親切なんかじゃないさ。だいたい、好きな女の心情を察して気遣  
う余裕もないしね」

さりげない口調で、俺は言った。

そして……………、俺の視線を受け、なつきはぼかんとした顔のま

ま固まっていた。

沈黙が、俺となっきの間に落ちた。おそらく、一分くらいは。  
「って！ ナツ、すっ、好きな人、いるのっ?!」

ようやく脳に情報が伝達されたようだ。なっきは大声を張り上げ、立ち上がった。

周囲の視線が一気にこちらに注がれる。

「図書館では静かにね、なっき」

俺は苦笑し、声をひそめてなっきを窘めた。

周囲の人達の険しい目線に気付いたなっきは、顔を真っ赤にし、体を縮こまらせて座りなおした。

「……ナ、ナツ、ほんと、それ？」

「それって？」

俺は頬杖をついて、訊き返す。

「その……好きな人、いるの、ナツ？ 彼女いるなんて、知らなかった」

なっきは肩をすばませ、何やら複雑な面持ちをしている。俺の目を見たかと思うと逸らしたり、ため息をついたり、落ち着かなげだ。

「彼女じゃないけどね。っーか、そんな驚くようなことか？」

俺の苦笑を、なっきはすまなそうな顔をして受ける。

「そっか。……ごめん、なんかちよつと驚いたけど、そうだよね。驚くようなことじゃないよね？」

ぎこちなく笑ってから、なっきは「そっかあ、そうなんだ」と、呟きを繰り返す。

俺は薄く笑った。そして、聞こえない程度の小声で、なっきに「悪いな」と謝っておく。

これは「好いタイムイング」とは言えないだろうから。

無神経だの、空気を読めだの、色々罵られそうだな。

だが、落ちてきそうな「ぼたもち」を逃す手はない。

卑怯者覚悟で、俺は「微妙な関係」を崩しにかかることにした。

そうして俺は、なつきに似合うからかけているといわれた眼鏡を  
はずし、机に置いた。

\* \* \*

薬学有機化学のレポート作成をそっちのけにして、なつきは訊い  
てくる。

「あくどいとか、卑怯とか、そういうことを、その……好きな人と  
やらに、言われたの？」

なつきは何やら怒った風に、眉をしかめている。

「いや？ ああでも、デリカシーがないとは言われたなあ」

「そうなの？ ちょっとその女酷くない？ ナツのどこ見てそんな  
こと言ったんだろ！」

「ははは」

俺は乾笑を返すばかりだ。たしかに、「ちょっと酷い」と思うね。  
あまりの鈍さに眩暈がしますが、ナツキさん？

「ナツって、面倒見いいし、真面目だけど面白いし、眼鏡と白衣が  
似合ういいヤツなのに！」

「そりゃどーも」

後半部分は外見的特徴で、しかも単になつきの個人的な趣味だ。

「いいヤツ」とは無関係要項だと思うが、俺的には喜んでおくべき  
褒め言葉なのだろう。……たいそう複雑だが。

「てゆーか、ナツ、……その、もしかしてフラれたの？」

俺の表情を探っていたなつきは、遠慮がちに訊いてきた。訊いて  
もいいのかなと、小首を傾げて確認をとった後に。

俺は曖昧に答える。

「……さあ、どうかな」

「……どうかなって」

「まだわからないな。まあ、しばらくはこのままって感じもするが。」

「ここは俺の努力次第ってやつか」

「そ、そうなんだ」

「うん。それで、さっきも言ったけど、俺はけっこう酷い男なんでつけこむよ、弱ってるところを狙ってね」

俺は不敵に笑んでみせる。芝居経験などないから、その演技は下手だったろうが、鈍いなつきはころつとだまされてくれそうだ。

案の定、頬を赤らめている。そして戸惑いがちに、俺を見る。

「弱みにつけこむとか……そういうの、ナツはしないっていつか、できないでしょ？」

「したくはないが、俺も余裕ないんで」

「……余裕なくすほどなんだ……」

なつきは気難しげに眉をしかめた。

なつきの一挙一動を、俺はまじろぎもせず観察する。タイミン  
グを見計らうためだが、切り出し口は見つからない。

「だけどさ、やっぱり弱みにつけこむなんて良くないと思うな。ナツらしくないし、ナツだってきつと後で後悔すると思う」

なつきは真摯なまなざしを俺に向けて言う。

「相変わらずだな、なつき。人が好いというか、甘いというか」

さっきまで己の失恋を嘆いていたにもかかわらず、今こうして人の恋路を心配する。

「もおっ、心配して言うてんのに！」

なつきは感情の起伏が豊かで、即座に面に出る。それなのにタイミングを計るのは、何故かしら難しいのだ。

心配顔をしていたと思えば子供っぽく拗ねてみせる。

「どーせわたしは考えが甘いですよ！ 甘々で悪うございましたっ！」

「いや」

俺は失笑を堪えられなかった。募る想いを、堪えられないように。

「甘いのは、好きだからな」

「見かけによらず甘党だもんね、ナツは」

拗ねたまま、なつきは言葉を返してくる。

「そ。甘いものについ目がいくんだよ。好きなんだから、こればかりはしょうがない」

なつきは小首を傾げた。話が微妙にずれていることに、ようやく気付いたようだ。

「今日はいかにもしょっぱそうだけどな」

そうして俺は、とどめの一言を付け足した。

「え？ ……あれ？ んんっ？」

眉間に皺を寄せた浮腫み顔の百面相は、笑いを誘う。

俺は頬杖をついたまま、頬を赤らめているなつきを見つめて言った。

「俺、デリカシーないんで、失恋して弱ってるどころ、つけこませてもらおうから」

「……って、ええっ！？ わたっ、わたしっ!？」

なつきは再び大声を張り上げ、あまつさえ椅子を倒す勢いで直立した。

周囲の人達の冷ややかな視線がまたしても集中したのは言うまでもない。

閉館時間が間に迫っていたこともあり、俺となつきは突き刺さる視線に追い出されるような形で図書館を出た。

ふと首を伸ばし、俺は小さく嘆息した。白い息が夜風に流れ、消える。

「ほれ、これ渡しとく」

俺のすぐ後ろ、所在無げについてきたなつきに、ノートを差し出した。

「重要な点を箇条書きにしたから、後はうまくまとめて清書すりゃ間に合うだろ？」

「あ、うん。ありがとう」

一回り小さくなっている気すらする、なつきだ。どうにも居心地が悪そうに、視線を泳がせている。

「何かわからないこととかあって詰まったりしたら、夜中でもなんでも電話しろ。できるかぎり協力する。だからちゃんと書けよ？」

まあ、それどころじゃない気分にした俺が言うのもなんだけど

「あ、あのさ、ナツ」

意を決したように顔を上げたなつきだったが、俺と目が合った瞬間に言いたかったことが霧散してしまっただけらしい。言いよどみ、そのまま固まっている。

俺は軽く息をついた。

「今すぐ答えださなくてもいいよ、なつき。期限はないから、今のところ。それに、そう簡単に割り切れないだろ？俺のことだけじゃなく、色々」

「ナツ……」

「困らせるつもりはなかったと言いたいところだけど、困らせたかったのがほんとのところだから、とりあえずは謝らない」

「う、うん」

なつきは素直に頷いた。

「けど、すごくびっくりした。なんか………どう言えばいいかわかんないけど、ナツ、えと」

「はいはい、なつき。謝るのはなし」

俺はぴしゃりと止めた。

悪辣だ、卑劣だと喚かれるより、「ごめん」と言われる方が数倍堪える。

「あ、うん。………そうだよな」

鈍いなつきでも、その程度の心情は察してくれたようだ。

「じゃ、とりあえず今夜は、他事考えずレポート完成させるよ？」

「うん」

「なんかぼーっとしそうになったら外出て深呼吸でもして、あと、俺に電話しろ。喝入れてやるから」

「うん」

「それと、モーニングコールしてやる。いつも何時だ、起きるの？」  
言葉少なく頷いていたなつきだったが、いきなり吹き出し、笑い出した。

「ナツって、ほんと面倒見いいよね。お人好しで甘い、ナツの方じゃない！」

「……む」

濃紺色の夜空の下、なつきは瞬く星のようになつころと笑う。

俺は眉根を寄せ厳しい顔をしてみせたが、なつきの笑いを止める効果はなかった。

「ナツ、ありがとね。なんか元気でたし。レポート、ちゃんと完成させて提出する。だから明日、Aランチ奢るね。コーヒーも」

「ああ」

「それとデザートも、だっけ」

「デザートはまだ先でいい」

「そうなの？」

「好きなものは後の楽しみにとっておく主義だ」

「そうなんだ、ナツ。意外」

「まだ落ちてこなさそうだからな」

「は？」

「……ぼたもち」

ふと、南の空を見上げると、白いハーフムーンが昇っていた。

やがては満ちて丸くなる、上弦の半月。

それはまるで棚の上で引っかかっているぼたもちのようで、俺は思わず笑みをこぼし、呟いた。

「まだまだ甘いよ、俺も」

卑怯者になりきれなかった俺を、横でなつきも笑っていた。



そういえば、もうすぐクリスマスだ。

街も、人も、にわかクリスマスチャンになって不自然なほど盛り上がっている。

とくにこれといった用事を入れずにいた俺だったが、それは「もしかして」という期待がほのかにあったからかもしれない。ともあれ。

この浮かれたイベントに乗じてみるのも、悪くはない。

乗じるのに失敗した彼女を見、そんなことをふと思った。我ながらゲンキンだなと、苦笑しながら。

無事、薬学有機化学のレポート提出を果たした、その直後のことだった。

ざわつく学食の一角、俺となつきは向かい合って座っていた。

俺は濃い目のコーヒーをすすっている。奢ってもらったAランチを平らげ、すっかり腹はくちくなっていた。

なつき、こと伊藤南月は何故だか不機嫌そうだった。顔をしかめて、俺を睨みつけている。

寝不足気味の目は、昨日をひきずってか、まだ充血していた。

「なんだ、さつきから」

俺は努めて冷静に、訊く。

実のところ、あまり平静ではない。後悔はまったくしていないが、昨日、失恋したところをつけこんで告白した相手を目の前にしているのだから。

「あのさ、ナツ」

どんつ、となつきは軽くだがテーブルを叩いた。

「もしかしてナツ、……苑田に彼女がいるってこと、知ってたんじ

やない？」

よもやなつき自身から自分の失恋話を蒸し返してくると思わず、俺は少々たじろいだ。むろん、顔にそれは出さない。我ながら上出来だった。持っていた紙コップが僅かに凹みはしたが。

「突然何を言い出すかと思えば」

「その口ぶりからして、知ってたんだ、やっぱり！」

ため息をついて、俺は紙コップをテーブルに戻した。

なつきは頬を上気させ、俺を睨んだままだいる。怒っているような、責めているような、そんな目で。

まいったな、と俺はもう一つため息をつく。わざとらしく、深く、全身で。

「だから？」

「だから！？ ナツ、酷いよ」

テーブルの上で、なつきはこぶしを握っている。

やはり「酷い」と責められるはめになった俺だが、殊勝に謝ったりはしない。

「なんで黙ってたの？ わたしが苑田のこと、す、好きだって気づいてたんなら、それとなく教えてくれればよかったのに！」

「言つて欲しかった？ 何も知らないはずだった、俺に？」

俺は作り笑いを装着し、なつきを見つめ返した。

「苑田には彼女がいるから諦めろって？」

「……………」

なつきはぐつと声を飲み込み、口角をきつく締めた。

「それを知ってたら、苑田に告白なんかしなかった？」

「……………」

意地悪なことを言っていると、わかっている。

なつきは俺から視線をはずす。顔を俯かせ、こぶしに力をこめていた。

なつきを泣かせるのは本意ではないが、泣かせたい気持ちも本心だった。

だからつい、堪えきれずに本心を吐露してしまった。

「告白をしなければ、失恋もしなくてすんだ？ そう思ってるわけ、なつき？」

「……………」

なつきは沈黙を抱えたままだ。

泣いている様子はないが、その寸前ではあるようだった。

俺は再び紙コップを手に取り、中身を飲み干し、立ち上がった。

「出よう。ここ、うるさい」

俺に促され、なつきは立ち上がった。一瞬何か言いたげに俺を見たようだったが、今度は俺から視線をはずした。

愛しさと後ろめたさ。

それらが同時に俺の心を過ぎった。

惚れた弱みにつけこまれていく気も、なんとなくしていた。

ずるいのは、どっちだよ。

舌打ちとともに、呟いた。

\* \* \*

学食から出、俺となつきは構内の駐輪場へ続く小道を歩いていた。しばし漂っていた沈黙を破ったのは、なつきの方からだった。

「…………… 八つ当たり…………… して、ごめん」

失恋の痛手を負っているせいだろう。なつきはずいぶんと情緒不安定のようだ。

さつきまで怒っていたはずが、今ではすっかりしよげ返っている。そんな態度をとられては、俺も謝るしかない。

「俺も口が過ぎたよ。悪かった」

「ううん。ナツの、言つとおりだよ。ごめん。ちょっとぐちゃぐちゃ考えちゃって」

ふいに、俺の後ろを歩いていたらなつきが足を止めた。

「考えなしなこと言っつて、ほんとごめん」

なつきは肩をすばませ、頭を下げた。

「わたしっつてほんとにっつても衝動的で。これからはちゃんと考えてから行動する」

なつきは毅然と顔を上げ、まじまじと俺を見やってそう宣言した。まいったな。俺を、何度落とせば気が済むのだろう、この女は？ ため息の濃さを示すような白い息が、俺となつきの間を遮っている。

俺は一步、足を踏み出した。なつきはとまどいがちな瞳を俺に向けている。

頬が紅潮しているのは寒さだけのせいではない。そう思うのは、俺の勝手な思い込みだろうか。

「消極的で慎重になつきなんて、らしくないっつて」

そしてなつきの頭に手を乗せ、髪をくしゃっと掻き、撫ぜた。

なつきの短い髪は、思っていたより柔らかかった。木枯らしに吹かかっていたせいで冷たかったが、触れていると気持ちがいい。

「俺はもう気にしてねーから、なつきも気にしなくていい。いや、ま、ちよつとは気にしてくれるといいかな、とは思ってるけど」

「ナツ……………」

「意地悪言っつたのは謝るけど、意地悪で黙っつたことは謝らない。

……………昨日も言っつたけど、俺、けっこうあくどい性格してるんで」

「そんなことないっつて、わたしも昨日言っつた。ナツ、氣遣っつてくれてたんでしょ？」

俺の手は、まだなつきの頭に乗せられたままだ。

「ごめんね、ナツ。それと、ありがとう」

なつきは照れくさそうに言っつて、笑っつた。

「……………」

本当に、まいった。

俺の自制心をいとも容易く切っつてくれる。無自覚にそれをしてく

るから、なおのこと性質が悪い。

「……もう少し待つつもりだったけど」

「え、何、ナツ？」

「デザートの甘いモノ、今、ちょっとだけもらってもいいかな、ナツキさん？」

「え、は？」

俺は笑顔を返した。それから不意をつく。

なっきの顎を指先に乗せ、腰を屈めた。

「……………っ!？」

そして軽く、口づけた。

自制心はまだなんとか保たせていたので、唇にではなく、限りなく唇に近い、頬に。

「はい。ごちそうさま」

「なっ なっ なっ ……っ」

なっきはあ然呆然、硬直していた。言葉を詰まらせ、林檎も顔負けなくらいに頬を赤くして。

平手打ち、あるいは鉄拳が飛んでこなかったことに安堵し、俺は小さく笑った。

「で、なっき。クリスマスの予定は？」

「なっ なっ ……っ」

「豪勢なディナーは、ちょっと用意できないけど。二人で、出かけよう」

「ナ、ナツッ」

俺はほとんど無意識になっきの手を握っていた。

「ん、いいよ、返事は今じゃなくても。でもできればOKの方向で検討して」

「ちよっ、ナツッ」

「よし。じゃ帰ろう。もう今日は授業ないし。家まで送る」

「ちよっ、ナツ! 待ってよっ」

俺は歩き出し、手を握られたままのなっきはつられて歩き出すか

たちになった。

「ナツ、強引！ ナツってそんなキャラだったのっ?!」  
肩越しに振り返ると、なっきはまだ顔を赤くしていた。

「知らなかった?」

「し、知らなかったよ、もうっ」

「ま、たまには俺も衝動的な行動に出るわけですよ、ナツキさん?」  
誰のせいでそうなるのか、わかってるよな? と意地悪な問いを  
放る。

鈍感になっきだが、その答を見出せないほどではないようだ。

なっきは心底困ったような顔をしているが、迷惑といった風では  
ない。

「もう、ナツ、ずるい……」

か細くなっきは呟く。

俺は応える。

「言ったる、俺、あくどいって」

確信犯的あくどさを示すように、俺は不敵に笑ってみせた。

いただいたデザート甘さが、唇に残っている。

完熟した林檎を思わせるなっきは、きつと極上の味がするだろう。  
いつかは、全てを平らげてやりたいね。

甘い、甘い、なっきを。

クリスマスまで、      あと数日。

ほのかな期待は、どうやら叶いそうだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6664y/>

---

Starting line

2011年11月21日23時46分発行